

2022 年度ティーチングポートフォリオ (文学部)

<目次>

1.	安藤 弥	p 1
2.	市野 智行	p 2
3.	金山 泰志	p 4
4.	古川 桂	p 7
5.	園田 博文	p 9
6.	鶴見 晃	p11
7.	手嶋 大侑	p15
8.	福田 琢	p17
9.	三川 智央	p19
10.	箕浦 尚美	p22
11.	山崎 健太	p24
12.	山脇 雅夫	p27
13.	渡邊 幸彦	p29

1、教育の理念

本学は浄土真宗・仏教の精神に基づく大学であり、建学の理念である「同朋和敬」を教育理念とする。お互いを「師弟」ではなく、ともに学び合う学友とし、異なるお互いを敬い、真に和していく関係を「同朋」と呼び、大切にす。また、私達は歴史的存在である。歴史は過去では無く、積み重なって現在を成り立たせているものである。未来に向かい、よりよく歩むために、健やかな歴史的視座を豊かに養う教育を重視している。

2、担当授業の概要（*兼担は除く）

- ・宗教と人間（親鸞と現代） 107名
- ・基礎演習Ⅰ 13名
- ・真宗史Ⅰ 31名
- ・仏教史（日本） 78名
- ・日本史特講 11名
- ・人文学演習ⅠⅡⅢⅣ 16名
- ・基礎演習Ⅰ 7名
- ・仏教文化演習ⅠⅡⅢⅣ 14名
- ・人文学講読演習Ⅱ10-1 15名
- ・真宗史〔別科〕 28名
- ・教化学演習Ⅱ〔別科〕 14名
- ・仏教人間学研究Ⅰ〔大学院〕 7名
- ・仏教史研究〔大学院〕 2名

3、教育の方法

- ・根本的には、「勉強」ではなく「学問・研究」に取り組むこと、仏教「を」学ぶのではなく、仏教「に」（自らを）学ぶことを基礎としている。
- ・その上で、基礎知識の習得のために講義形式を実施し、実践経験の蓄積のために演習形式を実施する。フィールドワークも重視して実践している。
- ・健やかに生きる力としての仏教、問題の本質を見極める力としての歴史的視座を身につけてもらうため、自らの人生と社会的な現場を常に実感する学びの場を形成する。

4、学生からの評価と授業改善への努力

- ・授業評価アンケートの数値は平均値以上を確保している。特記すべきは「わかりやすい」「熱意のある話」「最新の研究が反映された内容」というコメントをもらうことである。
- ・改善点として指摘されやすいのは「内容が多すぎる」「配付資料に工夫の余地がある」といった問題であり、これは授業内容の精査、配布資料をよりスリムかつビジュアル化するといった対策を考えて実践していく必要があると課題点を自覚している。

5、今後の教育目標

- ・教育はただ「わかりやすい」でよいものではない。高度な専門性を常に磨きつつ、それを適切な感覚で学生に還元し、ともに成長していくことを心がけていきたい。

1 教育の理念

本学の建学の理念である「同朋和教 共に生き、共に学ぶ」ことのできる教育指導体制の構築が重要である。その体制を担う一人として、教育、研究に取り組んでいきたい。なぜ、同朋大学で仏教を、文学を、社会福祉を学ぶのか。どのような授業であっても、この建学の精神を基軸とし、仏教を通して学んでいくことの意味を、学生と共有したいと考えている。

2 担当授業の概要

- ・基礎演習Ⅲ 16名
- ・基礎演習Ⅳ 16名
- ・教化学特講Ⅰ 16名
- ・教化学特講Ⅱ 20名
- ・七祖教義Ⅱ 22名
- ・死生学 65名
- ・浄土三部経講読演習Ⅱ 10名
- ・現代教養概論Ⅰ 96名
- ・親鸞と現代B 44名
- ・親鸞と現代F（編入・再履） 20名
- ・釈尊と現代D 43名
- ・教化学講義（別科） 28名
- ・真宗学演習B（別科） 14名
- ・論文指導 7名
- ・教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程） 4名
- ・教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程） 5名
- ・教化学実習（別科） 28名
- ・仏教学（音大） 53名

3 教育の方法

仏教学科の半数は寺院出身者（別科はほぼ全員）で、将来僧侶あるいは住職なることを志している。具体的には大谷派教師資格の取得を目指すことになるが、その授業内容は大きく講義、講読、演習、実習に大別できる。講義科目は、仏教学、真宗学の基本的な知識習得のため、学びの土台となる基礎的な学びを主要とする。講読科目は、文献を読むことと、文献へのアプローチを学ぶため、発表と講義を交互に行い理解を深める。演習科目は、発表資料

の作成から論文指導まで、主体的な学びを基軸に置く。特に仏教から各自が何を学んだのか、という方向性の学びを大切するため、現代社会における様々な問題を取り上げていく。実習科目は、より実践的な法話実習や法語作成など、卒業後をイメージした学びを展開している。加えて、臨床仏教、グリーンケアの学びも今年度の課題点を抽出し、より充実したものとしていく。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは少人数クラスでは実施していないため、全ての授業に関する評価とは言えないが、市野担当授業への2022年度の評価を踏まえ、次年度への見通しについて記したい。

・演習授業は資料作成方法など、授業導入により注力したい。文献を読み、理解し、他者を意識しながら資料を作成することは、卒業論文に向けても大切な準備の一つとなる。加えて、文献に対する引用マナーなども具体例を出し、丁寧に指導する必要があると感じている。

・ワークショップの意義と回収作業を丁寧にしていく必要性を感じている。ただ、やるだけでなく、なることを意味とやったことの成果を振り返ることで、より積極的な学びへとつなげていくことができると考えられる。また、全体共有の時間も必要であると感じている。

5 今後の教育目標

講義、講読、演習、実習の四領域を意識し、机上のみの学びにならないよう、学生が主体的に学ぶことができるような方法を取り入れていきたい。

特に、4年間の集大成である卒業論文の作成については、テーマ設定から論文の書き方に至るまで、よりきめ細やかな指導が必要であると考えている。

2022年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 金山 泰志

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、「建学の理念である「同朋和敬」の精神に基づき、社会的な価値観に埋没しがちな個性の存在価値を大切にします。文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことが本学科の教育目的です」（『学生生活 2020』3-11）とある。

金山は主に「歴史」分野を担当するものであり、「歴史学」主に日本史の領野から、教養的な「歴史知識」の教授に加え（授業としては講義系）、日本史の卒業論文の作成を通じ（授業としては演習系）、卒業後の社会で最も重要となる「思考力」を養うことを意識し、授業を行っている。今年度は特に、「学生の卒業後に必要な能力とは何か」について深く考えた。

2、担当授業の概要

基礎演習Ⅱ	25名
基礎演習Ⅲ	21名
基礎演習Ⅳ	8名
人文学演習Ⅰ	8名
人文学演習Ⅱ	8名
人文学演習Ⅲ	9名
人文学演習Ⅳ	9名
人文学講読演習Ⅰ	17名
人文学講読演習Ⅱ	13名
日本文化史（思想史）	76名
スポーツ文化史（オムニバス形式）	11名
現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式）	94名
日本史概説	37名
日本史特講3	11名
サブカルチャー論	57名
歴史文化概論Ⅱ	64名
名古屋・中村学講義（歴史文化）	15名
卒業論文	9名
卒業論文指導	9名

3、教育の方法

文学部人文学科の教育理念にあった「教養力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「日本史概説」「日本史特講」「歴史文化概論」「日本文化史（思想史）」「サブカルチャー論」「地域文化論」などが該当する。これらの授業は主に講義を主軸とした教授を行っており、日本史などの専門的知識ばかりを詰め込む授業とはせず、歴史と文化にまで視野を広げ、学生が卒業後に社会で生きていくうえで有用な知識を獲得してもらうことを意識している。そのため、既存の教科書などは使用せず、自身で作成した授業プリントを土台に、最新の歴史学知見を踏まえた授業内容となるように努力している。

もう一つの「思考力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」などが該当する。この「思考力」を培う授業は、文学部人文学科の学びにおいても最も重要であると考え。ここでいう思考力とは、大学で自らが研究することによって得られる「専門的な思考力」のことを指す。自分で研究テーマを見つけ、その答えをその専門領野の研究手法をもとに、自ら考え導き出していく。その総まとめが「卒業論文」である。その研究活動の過程で、その専門領野ならではの「思考力」が自然と身についていく。歴史学であれば「歴史的思考力」であり、文学であれば「文学的思考力」となる。その思考力は本を読んだり、授業を漫然と受けているだけで、簡単に見につくものではない。大学生生活四年間を費やして、研究を実際に行ってみることで、身についていく力である。演習の授業では、研究の技法を教え、専門的な論文を書き上げることを目標に、史料の講読や研究の進め方を指導している。

今年度は特に、その力がどのように身についたのか、そしてその力が今後どのように活かされると思うのか、などをゼミの4年生を中心にインタビュー調査を行い、動画教材として作成した。来年度以降の授業（主に初年度教育）に活かしたい。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2021年度に実施された授業評価アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度、授業への満足度などが、概ね平均値を上回っていた。

改善点としては、大人数授業での学生対応があげられる。近年の学生は、配布資料や板書について要求が細かい傾向にある。ガイダンスでしっかりと事前説明をし、共通理解を得る必要性を痛感した。

また、コロナ禍による影響がある程度落ち着くことが予想される来年度にあたっては、学生とのフィールドワークを中心とした授業展開も行っていきたい。座学だけでなく、実際に歴史を体験してもらうことも、歴史学の学びにおいて重要である。さしあたって来年度は、「地域文化論」やゼミの授業などで実践していきたい。

5、今後の教育目標

今年度の特筆事項として、高大連携授業を担当したことがあげられる。大学でのゼミとは違い、受講生の多くは、歴史（日本史）に興味のない高校生であった。初回の授業で、授業に対する興味のなさに衝撃を受け、「歴史学を学ぶ意義とは何か」という内容に、急遽授業計画を変更した。しかし、私の能力不足もあり、最後まで興味のない生徒は興味のないままであった。

この問題は、高校生に限った問題ではなく、今後より一層身近な問題となることが容易に想定される。少子化に伴い、そのような大学生が必然的に増えることも考えられるだろう。その際、大学で学ぶ（研究する）意義というものを、自覚させるような授業をまず行っていかなければならない。研究者が大学教員として生きていくためには、以上の問題に真摯に取り組まなければいけないことを痛感した1年であった。

(以上)

1、教育の理念

私は歴史学(西洋史)および学芸員課程の授業を担当しており、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。

1、歴史的思考力を育むこと。グローバル化が進み、情報や流通において国境の意識が薄れていく一方で、偏った情報のみで得た知識から他国や他者との差別化を図ろうとする動きが強まりつつある。このような問題の背景には異なる時空間の文化に対する認識や理解が不足していることが考えられる。担当する西洋史分野の授業では、歴史的な文脈において現代に起こる様々な事象を捉える力をつけ、異文化への認識や理解を深めていきたい。

2、情報の真偽を十分に検討する力を育てること。歴史学の基礎である原典(=史料)まで戻り、史料の信憑性を検証する史料批判は、情報の真偽を十分に検討する力を育てること、主観的意見と客観的意見をしっかりと分けて捉え、物事を認識する力を養うことにつながる。

3、文化財を過去から未来へ繋ぐ意識を形成すること。学芸員課程においては、教育機関や地域連携の機関としての重要性が増してきており、コミュニケーション力や企画力を養うことも授業に取り入れているが、何よりも文化財を守り、継承して次世代に渡す役割を担う学芸員としての意識を育てていきたい。

2、担当授業の概要

【専門科目】

欧州文化史 スポーツ文化史 基礎演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ 人文学講読演習Ⅰ・Ⅱ 歴史文化概論Ⅰ 現代教養概論Ⅰ 文化交流史 文化総合 人文学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
卒業論文 卒業論文指導

【共通教養科目】

外国史(西洋)

【学芸員課程科目】

博物館概論 博物館情報論 博物館教育論 博物館実習Ⅰ 博物館実習Ⅱ

3、教育の方法

西洋史の基礎的な知識がない学生に対し、まずは関心を持ってもらうことが必要と考えており、身近なものや知名度の高い人物や事項から西洋の歴史を学んでもらえるように心がけている。

学芸員課程の担当する講義全てにおいて、前半の講義で学んだ内容が実際どのように実現されているかを自らの目で確かめるため、博物館を訪問して各分野について分析・考察し、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。これにより博物館の資料を鑑賞する立場から博物館を作り、運営していく立場の視点を養うことを促している。これらの授業を通して、さまざまな視点から博物館の活動を自ら体験し、分析するとともに、パワーポイントを用いた発表やディスカッションを繰り返すことで、プレゼン力、意見交換をするコミュニケーション力も養われる。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度に行われた授業評価アンケートでは、ほとんどの項目で平均値を上回った。「わかりやすい」、「新しい視点で見ることができるようになった」、「毎回、新しい発見がある」などのコメントが寄せられた。

評価が他よりも低かったものは、コミュニケーションの取り方であり、コメントペーパーに加え、授業内で意見を聞いて回るなどの工夫をしたい。

5、今後の教育目標

教えられることから学ぶことへの転換を図り、知る楽しさからわかる楽しさを実感できるよう学生たちをアシストすることが教育の目標である。そのためにも学生が学びのきっかけを見つけることのできる授業や、わかるために必要な視点や力を持てるような授業を展開できるよう励みたい。

2022年度ティーチングポートフォリオ

文学部 教授 園田 博文

1、教育の理念

「同朋和敬」の精神を建学の理念としており、「共に学ぶ」「共に育つ」教育を実践していく。園田の担当する授業は、国語学関連の科目である。国語学の授業を通して、文化への貢献、広く豊かな教養の獲得、真理の探究を目指している。さらに、母語としての日本語、第二言語（外国語）としての日本語、自文化としての日本文化、異文化としての日本文化に気づけるように配慮している。

2、担当授業の概要

国語学概論Ⅰ 54名（大人数授業）
国語学概論Ⅱ 64名（大人数授業）
国語法 36名
国語史 58名（大人数授業）
日本語文法 33名
言語学概論Ⅱ 36名（臨時4回）
人文学講読演習Ⅰ 4－3 27名
人文学講読演習Ⅱ 4－3 21名
人文学講読演習Ⅰ 1 4－1 8名
基礎演習Ⅲ C 19名
基礎演習Ⅳ B 8名
人文学演習Ⅰ D 8名
人文学演習Ⅱ D 8名
人文学演習Ⅲ D 4名
人文学演習Ⅳ D 4名
現代教養概論Ⅱ 115名（オムニバス2回）
情報社会 B 13名（オムニバス1回）
仏教文学研究（院） 2名
卒業論文 4名
論文指導 4名

3、教育の方法

基礎演習Ⅳおよび人文学演習Ⅰ～Ⅳは、所謂ゼミである。1コマ90分の授業で2～3名の学生が発表し、発表に当たっていない学生は、質問や意見、感想を述べ、全員でディスカッションを行った。ゼミでは主体的な学びを重視しているため、発表する内容は、基本的に学生が自分で決める。決める際には適宜助言を行っている。ゼミで何回か発表し、教員や他の学生の意見も参考にしながら、論文指導を受け、卒業論文を仕上げていく。今年度は、新しい取り組みとして、パソコンが使える図書館4階のグループ学習室を活用した。基礎演習Ⅲは、さらにその前の段階の授業である。

国語学概論Ⅰ・Ⅱ、国語法、国語史は、基本的には講義形式の授業である。履修学生は、36名～64名というように割合多くなっている。人数は多いのであるが、なるべく双方向の授業になるよう心がけている。1回の授業で全員に別々の練習問題を与え、口頭で解答するような取り組みも行っている。授業終了後には、リアクションペーパーを配布し、授業での気づきについて記入してもらっている。これにより、一人一人の理解度や関心の度合いを把握するようにしている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度前期・後期とも授業評価アンケートを実施し、その結果を見て、よい点はさらによくし、改善すべき点は改善する方向で授業に反映させた。これについては、教員からのフィードバックとして報告をまとめ、事務にも提出した。

5、今後の教育目標

卒業論文については、構成がしっかりと示せるように指導する。研究の背景、目的、方法、結論、意義についても4月の時点から意識できるようにする。図書館4階のグループ学習室を活用し、パソコンを用いて、コーパスを使ったりパワーポイントで資料を作成したりできるように努める。

その他の講義・演習の指導については、学生の主体性を重視しつつ、双方向の授業となるように心がけたい。学生が質問や発言をしやすい環境を作り、ディスカッションを行う。授業終了後にはリアクションペーパーで学生の気づきを確認し、次回の授業にフィードバックさせていく。

一方的に講義し、知識を授けるというような教育ではなく、「共に学ぶ」「共に育つ」という教育理念を重視した双方向性の高い教育にする。

1、教育の理念

私の教育理念は、学びを通して社会や人々のありようをより深く想像的に捉え、自らの主体的な態度を創造的に決定していく力を養うことにある。そのために以下のような点に留意しつつ、教育に携わっている。

①テキストの丁寧な読解

私の専門は、広くは仏教学、中でも浄土真宗の宗祖親鸞の思想に関する真宗学であり、仏教文献を対象とする。そのため仏教の概念・用語、また漢文・古文に習熟することが必要である。テキストに慣れる基礎的な学びを重視しつつ、仏教の概念・用語を適切に理解し、用いることができるようになることが、テキスト読解にまず必要である。この点を重視し、真宗学の基礎を学ぶ講義・演習を大切にしている。

②真宗を学として学ぶ

まなぶ（学・習）はまねぶ（真似）と同根の言葉であるとされるが、学としての真宗学は、親鸞の学び方に学ぶことであると先学（金子大榮『真宗学序説』、文栄堂、1966年）は指摘している。そこで真宗学とは、親鸞が仏教（経典・論疏）に学んだ学び方を明らかにし、仏の教えを歩む道を自ら選び取っていく主体的な学問であると理解している。

私は、大谷大学文学研究科真宗学専攻博士後期課程を満期退学後、真宗大谷派（東本願寺）教学研究所に勤め、主として親鸞教学の研究および真宗大谷派の教学・教化施策、僧侶養成に従事してきた。同朋大学文学部仏教学科専任教員となって以後は、それらの経験を踏まえ、これから仏教学・真宗学を学ぶ学生に対して、テキスト（聖典）を読解し、歴史を学ぶことが、仏教・真宗の人間観・社会観を学ぶことであるとともに、それは現在の人と社会のありようを考える視点であることを伝えている。

そこで特に重視しているのは、人権・差別の問題である。仏教思想、親鸞思想において平等は重要な教えであるが、この平等の教えを確かめ、人びとと共に平等を志向する主体を獲得するためには、我々自身に潜む差別性、現代社会における人権の問題への気づきが不可欠である。学生がそれぞれの経験を通して、また自らの経験を超えて社会や人々のありように目を向けることができるよう、講義・演習共にテキスト読解とともに実践的な学びも重視している

2、担当授業の概要

2021年度担当科目

教行信証講読演習Ⅰ	19名
教行信証講読演習Ⅱ	12名

真宗学演習Ⅰ	4名
真宗学演習Ⅱ	4名
真宗学演習Ⅲ	7名
真宗学演習Ⅳ	6名
真宗学概論Ⅰ	15名
真宗学概論Ⅱ	15名
真宗史Ⅱ	14名
真宗文化特論	2名
宗教と人間（親鸞と現代）C	40名
宗教と人間（親鸞と現代）D	38名
教化学演習A（別科）	13名
真宗学講読Ⅲ（別科）	25名

3、教育の方法

現在は学部生対象の仏教テキストに関する講読演習科目（「教行信証講読演習」、「真宗学講読」、「真宗学演習」）、および真宗学及び親鸞思想の概論科目（「真宗学概論」、「教化学演習」、真宗史Ⅱ（大学院対象「真宗文化特論」と同時開講）、「宗教と人間〈親鸞と現代〉」）を担当している。講読演習では、親鸞思想を学ぶ必須テキストである『教行信証』（「教行信証講読演習」）および『歎異抄』（「真宗学演習」）の読解を演習形式で行い、仏教概念・用語および漢文・古文に対する習熟、親鸞思想の基礎的な理解を目指している。概論では、真宗学概論は、真宗学を構成する主要なテキスト、歴史を概観し、真宗学を専攻するにあたって入門となる授業となることを目指している。同時開講の真宗史Ⅱ・真宗文化特論は、視聴覚教材（動画・絵画史料）を用いて、親鸞の伝記を真宗文化として捉え、真宗史料を多角的に考察できるようになる授業を目指している。社会福祉学部の学生対象の「宗教と人間（親鸞と現代）」は、宗教と接点の薄い現代の若者が、真宗に少しでも触れ、自らや社会のありようを振り返る視点となるよう、親鸞の生涯と思想を視聴覚教材（動画）も用いつつ、授業を行っている。1年で真宗大谷派教師資格取得を目指す別科対象の「真宗学講読」は『教行信証』を概括的に学ぶ講義形式の授業であり、「教化学演習」は伝記『宗祖親鸞聖人』（東本願寺）をテキストに、親鸞の生涯および親鸞が大切にされた法語（仏典の言葉）を通して、親鸞思想を伝える教化を視野に演習形式の授業を行い、資格取得後、僧侶として従事することを意識した授業を目指している。

講義形式の授業では、主に資料及び板書を用いしつつ、パワーポイントやDVDを用いた視聴覚教材（写真資料、漫画・アニメ）を用いている。親鸞が生きたのは平安末から鎌倉時代であり、親鸞思想の背景となる歴史、社会状況共に現代人には容易に把握しがたい側面

がある。ここに古典を理解する一つの障害があり、時代と社会を異とする歴史資料としての側面に注意を向けつつ、現代から過去、過去から現代を思考する往還的な視点の中で、テキスト及び思想を捉えるよう、工夫している。

たとえば文献研究は、活字資料を主なテキストとなるが、親鸞には多くの自筆著作が遺されており、こうした原本（複製・写真）に触れることも親鸞思想を考えるに際して重要なことである。『教行信証』及び『歎異抄』を用いた文献研究科目も含め、親鸞という人に触れることができる資料を用いる他、歴史背景や社会状況を視覚的に捉えることができるよう、漫画・アニメを用いる。

また、教育は、教員の意見・考えを押しつけるものであってはならず、学生自身が学び、新たな発見をしていくことが重要である。学生の意見・考えは、学生自身が新たな知見にいたるための重要な手掛かりであると考え、学生の意見・考えを尊重し、対話的に授業ができるよう努めている。そのため授業時、あるいは授業以外でも質問・相談ができるよう、少人数教育である点を活かして関係を構築するよう努めている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートが行われた科目は以下の科目である。

教行信証講読演習、真宗学概論、真宗史Ⅱ、宗教と人間（親鸞と現代）、教化学演習、真宗学講読

演習科目は、できる限り学生の主体的な話し合いを優先し、必要な場合助言することとしている。そのため教材や情報の提示は少ないので、時に話し合いがしにくいと感じることあるようである。学生が対話しやすい環境となるよう心がけるとともに、話し合いのポイントとなる点についてはより積極的に関与するよう工夫していきたいと考えている。またテキストに対する理解度を深めるため、より基礎的な学力を養成することが必要であると考えている。

講義科目は、おおむね受講生の評価はよいが、授業によっては難度の高さへの指摘もあるため、教材を工夫するなど、新たな取り組みが必要があると考えている。また2022年度は一部科目で授業運営において課題があった。受講生全員が受講しやすい環境を維持するよう、受講生に対する指導をより積極的に行っていきたい。

5 今後の教育目標

前記教育理念に基づきつつ、同朋大学が重視する少人数教育を活かして、全人的な教育を心がけ、学生の生きる力を養う教育を目標としている。

文学部仏教学科は、真宗大谷派僧侶となるべく、真宗大谷派教師資格取得を目指す学生の他、仏教に興味を持って入学する学生、あるいはまったく仏教に縁のないところから入学してくる学生もいる。関心も目標も異なる学生が共に仏教を学び合う環境作りが課題で

ある。そのためにも学生の声を聞くことが必要であり、対話しながら学ぶ環境を目標として取り組んでいきたいと考えている。

2022年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 手嶋大侑

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、建学の理念（同朋和敬）に基づいて個性の存在価値を大切に、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことである。

以上の教育理念のもと、手嶋は「日本史」分野の教育を担当し、学生の「教養力」「思考力」を養う授業を実施してきた。具体的には、講義系の授業を通して、基本的な知識の教授を、演習系の授業を通して、情報収集力・読解力・思考力を養う授業を実践してきた。

2、担当授業

- ・基礎演習ⅡD
- ・基礎演習ⅢA
- ・基礎演習Ⅳ
- ・人文学演習Ⅰ
- ・人文学演習Ⅱ
- ・人文学演習Ⅲ
- ・人文学演習Ⅳ
- ・卒業論文
- ・卒業論文指導
- ・人文学講読演習Ⅰ
- ・人文学講読演習Ⅱ
- ・古文書基礎学Ⅱ
- ・日本文化史（古代・中世）
- ・日本史
- ・日本史特講Ⅰ
- ・地域文化論
- ・現代教養概論Ⅱ（オムニバス）
- ・名古屋・中村学講義（現代社会）

3、教育の方法

「教養力」を養う授業としては、日本文化史（古代・中世）、日本史、日本史特講Ⅰ、地域文化論、古文書基礎学Ⅱが該当する。これらは自作の授業資料（レジュメ、パワポ）を用いた講義を主軸に進めており、そこでは、単なる知識の詰め込みに終始しないよう、授業内容を考えている。例えば、ある歴史的出来事に関する複数人の研究者の解釈・理解を示すこ

とによって、時代による解釈の変化、視点の転換の大切さ、多様な解釈が並立する（正解は一つとは限らない）ことなどを意識的に教えるようにしている。また、地域文化論では、フィールドワークを実践するなど、座学ではない学びの方法も経験させている。

「思考力」を養う授業としては、人文学講読演習、人文学演習、卒業論文などが該当する。人文学講読演習では、日本古代史関係の史料を輪読する授業を実施している。そこでは、学生たちに担当条文について調べてもらい、レジュメを作成させ、レジュメに基づいて発表してもらっている。この作業を通して、必要な情報を収集・整理し、レジュメにまとめ、それを他人に伝えて議論する力を習得させるようにしている。また人文学演習、卒業論文では、学生の発表主軸の授業を実施している。そこでは、歴史学的な考え方（論理的思考）・史料読解・史料操作などを指導しつつ、先行研究の読解、論点の整理、テーマ（問題）設定、テーマに対する自身の見解を導き出すための調査・分析を学生に実践させており、この作業を通して、学生の歴史学的「思考力」を養っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度に実施された授業評価アンケートでは、総合的に平均以上であった。

ただし、講義系の授業において、学生が発言しやすい雰囲気が作れているかどうかの点が比較的低かったのは改善点だと考える。これについては、講義系授業で学生とコミュニケーションをとる時間が少なかったことが一つの要因と感ずるので、来年度はコミュニケーションの時間を積極的に作り、良い雰囲気づくりを心掛けていきたい。

5、今後の教育目標

学生に、“力が身に付いた”と実感してもらえるような授業を目標としたい。この点を達成するためには、文系学問に対する認識を根本的に変えていく必要があるので、人文学科の学びを通して身に付く能力がいかに社会に出てから役に立つものなのかを、学生に繰り返し伝えていく努力を継続していきたい。

1 教育の理念

建学の精神を拠りどころとし、共に問う姿勢を基本におき、大学という場所でこそ可能な、人文科学の基本を学んでもらう。具体的には語学・政治文化・哲学的理解のうえに成りたつ思想史研究・文献学とはどのようなものかを伝えてゆく。またアジア諸地域に伝播し、各地の伝統文化や宗教と交流し、独自の展開を遂げた仏教文化を学ぶことで、次世代の若者に異文化共生の国際感覚を身につけてもらえるよう務める。以上は例年変わらない目標である。

2 担当授業の概要

2022 年度担当科目

2209 基礎演習Ⅱ	13 名
2408 パーリ語基礎学	22 名
2413 仏教文化講読演習 I4-4	12 名
3209 宗教と人間（釈尊と現代）A	108 名
3331 仏教文化演習ⅠA	5 名
3332 仏教文化演習ⅡA	5 名
4212 宗教と人間（釈尊と現代）E	48 名
4581 仏教学研究（大学院）	3 名
4681 仏教人間学研究Ⅰ（大学院）	14 名
5291 仏教学講義（別科）	25 名
4505 仏教史（インド）	17 名
5305 仏教学概論Ⅰ	13 名
5306 仏教学概論Ⅱ	14 名
教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程）	4 名
教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程）	5 名
教化学実習（別科）	25 名

3 教育の方法

経験的に、講義においても講読・演習においても適切なテキストを定めることが重要と考えて

いる。学生はテキストの目次によって授業の全体像を把握できる。(本来ならばシラバスによって授業の全体像を把握してほしいところだが、実際問題としてシラバスにしっかり目を通す学生は少ない。テキストを持参させ、繰り返しその目次の中で毎回の授業がどこに位置するかを伝えるよう心がけている。) また予習・復習・課題提出に際しても有効である。現在、自作テキスト形式の授業(全文を自分で執筆しコピー・簡易製本して学生に無料配布し、これに基づいて授業を進める形式)は本年度については三科目に留まる(「宗教と人間」「パーリ語文法」「仏教史(インド)」。本来は「仏教学概論」についても自作テキストを用意したいのだが、いまは時間的余裕がないため、やむなく既成の仏教入門書を代用しているが、これというものがなく、数年に一度は書を変えるのが現状である。(次年度は新たな教科書を使用する予定。) 大谷派教師資格科目については東本願寺出版部の指定テキストを使用している。基礎演習は学生が各自に課題図書を選び、読書レポートを提出し、それを個別に添削・指導して、将来的に卒業論文を書くための最初の準備としている。本年度は最後に文集を作成した。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは例年と較べて大きな変動はないが、自由記述欄に書かれた感想がおおしく減ってきている。反応が少なくなったとも言えるが、ただしその代わりに、Microsoft Teamsを通じて、毎回の授業に感想を寄せてくれる学生が増えてきた。コロナ禍の非常手段であったオンライン講義やインターネット上のやりとりを通じて、新しい学生とのコミュニケーションを模索している。学問への入口としてネットは今後さらに活用していきたいが、大学での研究はあまり安易なものであってはならないが、インド仏教およびアジアの仏教文化を紹介するにあたっては視覚資料も重要である。

近年はレポート等の訂正を命じたら再提出すること、指定した教科書は購入して持参すること、そもそも講義には筆記用具やノートを持ってくること、といった常識的に理解できる(と我々が思っている) ことに関しても、事前に十分な説明がなかったという批判が寄せられる場合もある。常識を捨てて改善を考えなければならないところまで来たとも思う。

5 今後の教育目標

学ぶことの楽しさと、大学の学問とは本来、資格を取るためや就職のための努力ではなく、真理を探究したいという衝動を解放する喜びであることを、若い世代に少しでも理解してもらえるよう今後も務めてゆきたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に近現代文学に関する授業を担当しており、文学をとおしてさまざまな時代や社会の中での人間そのものを見つめるとともに、テキストの読解に必要な知識や思考力、また、テキストを時代や社会といった文化的背景と関連づけて考えることのできる広い視野を養うことを目指している。文学は虚構ではあるが、そこに描き出されているのは、まさに人間の真理である。文学を探究することによって、現代を生きる力を育んでいきたいと考えている。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学概論Ⅱ 86名
- ・日本文学史（近現代）2 52名
- ・日本文学（近現代）2 50名
- ・人文学講読演習Ⅰ2-4 10名
- ・人文学講読演習Ⅱ2-4 19名
- ・人文学講読演習Ⅰ7-3 21名
- ・基礎演習ⅠD 23名
- ・基礎演習ⅣM 8名
- ・人文学演習ⅠB 7名
- ・人文学演習ⅡB 7名
- ・人文学演習ⅢB 7名
- ・人文学演習ⅣB 7名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 94名
- ・論文指導 8名
- ・卒業論文 8名
- ・国語科教育法Ⅰ（教職科目） 4名
- ・国語科教育法Ⅱ（教職科目） 4名
- ・国語科教育法Ⅲ（教職科目） 2名
- ・国語科教育法Ⅳ（教職科目） 2名

3、教育の方法

まず、「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。学生が主体的に課題に取り組むことで、文学テキストそのものを理解する力を養うとともに、情報収集や分析の方法を実践的に身につけることができると考えるからである。また、学生同士のディスカッションをとおして、各自が、自分の意見を言葉としての確に表現すること、あるいは逆に、他者の意見をしっかりと理解することの重要性に気づき、互いの視野を広げ、テーマに対する考えを深めていくことが可能となる。最終的には、そのテーマに対する自らの考えをレポートとしてまとめることで、卒業論文に向けた論文作成の方法も徐々に身につけていく。

次に、「日本文学概論」「日本文学史」「日本文学」「現代教養概論」といった講義形式の授業においては、第一に、わかりやすい授業を心がけている。その工夫の一つとして、授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それをういながら授業を進めている。また、授業ごとに学生の理解度は異なるため、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙に、学生自身が授業の中で感じた疑問点や興味を持った点などを記入してもらい、次の授業の具体的な展開に役立てている。そして、二つ目に心がけているのは、学生自身に考えさせる授業である。講義形式の授業では、どうしても学生が受け身になってしまうことが多いが、授業の中でこちらから学生に問いかけたり、逆に、学生から意見を言ってもらったりすることで、学生自身が考える時間を作り、できるだけ双方向的な授業展開になるよう配慮している。また、先ほどのコメント用紙に記入された学生からの疑問や意見の中で、ほかの学生の考えを深めるために役立つと思われるものについては、必ず次の授業の冒頭で紹介するようにしている。

最後に、「国語科教育法」であるが、この授業は人文学科の科目ではなく、中学校・高等学校の国語の教員免許取得を目指す学生が、3～4年次に履修する教職課程科目である。3年次には、学習指導要領の理解や学習指導案の作成など、国語科教育の基礎的な学習や実践を行い、4年次には、模擬授業を重ねることによって、授業や学習指導の上達を図っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度の「学生による授業評価アンケート」では、前期が「日本文学史（近現代）2」「人文学講読演習Ⅰ7-3」、後期は「日本文学概論Ⅱ」「日本文学（近現代）2」「人文学講読演習Ⅱ2-4」の5つの授業について、学生からの評価が行われた。

その結果は、まず講義科目の「日本文学史（近現代）2」「日本文学（近現代）2」「日本文学概論Ⅱ」については、「日本の歴史的背景とともに小説の変遷がわかり、大変興味深い」「熱意が伝わってくる講義で、教養としてもとても良いものを得ることができる」（日本文

学史（近現代）2）、「名だたる文豪の生涯を詳しく学べ、さらに先生のオススメの本も紹介され楽しく本を読める絶好のチャンスだと思った」（日本文学（近現代）2）、「語りの構造という今までとは違う視点で小説を見ることができてとても良い」（日本文学概論Ⅱ）という好意的な評価が多かった。次年度も学生自身が興味関心を持って臨めるようにさらに工夫して授業を行いたい。

また、演習科目である「人文学講読演習Ⅰ7-3」「人文学講読演習Ⅱ2-4」については、「夏目漱石の小説にとっても興味を持ち、漱石の違う作品も読んでみたくなった」（人文学講読演習Ⅱ2-4）というように、演習をとおして学生の学びの幅を広げることができたように思う。今後も学生の主体的な発表を中心に、学生自身に考えさせる学習を展開したい。

「学生による授業評価アンケート」の対象となった授業以外についても、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、文学をとおして人間や社会の真理を探究するとともに、その探究をとおして、現代を生きる力を学生たちに育んでいくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生が興味・関心を持つことのできる授業、そして、その興味・関心をもとに、学生自身が課題を見つけ、解決していく力を養えるような授業を心がけるつもりである。

1、教育の理念

同朋大学の建学の精神「同朋和敬」に基づく「共に学ぶ」「共にいきる」教育の実践を目指している。私は、主に日本文学（古典）の教育を担当しており、昨今、「なぜ古典を学ぶのか」という問いが多く出されるようになってきたと感じているが、このような問いを含めて疑問に真摯に向き合って思考することこそが、人文学において必要なことと考えている。学科のポリシーに掲げられているように、人文学は、「混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育む」ものと言えるが、幅広い学びとともに、学生達が何かを探究する喜びを実感できるような教育を行いたい。

2、担当授業の概要

2022年度の担当授業科目の概要を示す。

- ・日本文学概論Ⅰ 古典文学概論
- ・日本文学史（中世） 鎌倉時代・室町時代の日本文学史
- ・日本文学（中世）2 お伽草子とその周辺
- ・仏教文学 仏伝と転生譚
- ・書誌学 書誌学入門
- ・人文情報学 人文情報学入門
- ・人文学講読演習Ⅰ 『酒吞童子』を読む
- ・人文学講読演習Ⅱ 『徒然草』を読む
- ・現代教養概論Ⅱ オムニバス 2回分「日本古典文学を考える1 現代社会において古典を学ぶことの意味」「日本古典文学を考える2 物語の伝承に時代の関心を読む」
- ・情報社会 オムニバス 2回分「文章や画像の利用と著作権」
- ・基礎演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
- ・論文指導

3、教育の方法

上述の教育理念の達成のため、初年次教育や、初回の授業において、「大学での学びとは何か」「古典にはどのような意味があるか」など、学ぶことの意義を問いかけ、学生とともに考え、意識するようにしている。

古典文学への関心を高めてもらうため、さまざまな資料の画像をプロジェクターで投影して示している。講義科目における成績評価の方法としては、毎回のコメントカード（考察・発見の記録）を試験と同程度に重視している。コメントカードの目的は、主に、内容理解の確認と思考力や表現力の向上であるが、学生を個別に理解して適切な助言をするた

めでもある。アカデミックアドバイザーとしてかかわる基礎演習や人文学演習の学生だけでなく、できるだけ多くの学生を知ってそれぞれに合った対応ができるように努めている。必要な情報は教員間で共有するように心がけている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度の「日本文学概論Ⅰ」のアンケート自由記述に、「昔の書物に関する情報を沢山知ることができてとてもいい授業です。」「興味深い単元を深く進められていて、とても楽しい。」等とあった。このように高い関心を持ってくれている学生がいる一方で、古典文学に苦手意識を持つ学生も多くいるため、学生のコメントをよく確認し、理解の足りていない箇所を速やかに補うように心がけている。また、興味深い意見は授業内で紹介している。これは、「日本文学（中世）」「日本文学史（中世）」「仏教文学」等でも同様である。

「書誌学」の授業は2年目だが、「実際の古文書に触れる機会がとても多くて触感を感じられるのが分かりやすいと感じます。」等の感想を得た。複製の卷子本を扱ったり、袋綴じの江戸時代の和書の書誌を記録したりするなど、実際に物に触れて比較検討することを重視している。もちろん、今や古典籍もインターネットで精細な電子画像を多く閲覧することができ、「書誌学」でも「人文情報学」でも、それらの活用が欠かせない。しかし、実際に自分で古典籍に触れて調査すると、いかに多くの情報を見落としていたかに気付く。その体験に、原拠に当たることの面白さや、研究一般に対する基本姿勢を学んでほしいと考えている。

5、今後の教育目標

- ・人文学を通して人としての豊かさを育む
- ・古典文学に苦手意識がある人達に向けた授業方法の開発

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に古典文学、特に上代中古という古い時代に関する授業を担当している。古典文学を享受することと理解することの間には大きな違いがあるが、理解するために必要なのは自分たちとは異質な人間である古代に対する理解である。一文を理解するために必要な古典文法などの基礎的な要素は当然として、死生観はどうであったのか、男女関係はどのように発想されたのかなど、現代日本人とは決定的に異なる他者である人間が紡いだテキストを、その水準において解像度を上げていくことが求められる。そこで培われるのは、「時代が変わっても同じ日本人」だから理解できる古典文学ではなく、自身とは世界観も常識も何もかも違う他者に接近していく為の態度と作法である。古典文学を学ぶことを通して、共通言語としての「教養力」、他者理解の為の「思考力」を養成する教育を行いたい。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学史（上代・中古） 9名
- ・日本文学概論Ⅰ 1名
- ・日本文学（上代・中古） 13名
- ・人文学講読演習Ⅰ10-1 7名
- ・人文学講読演習Ⅰ3-1 2名
- ・人文学講読演習Ⅱ3-1 1名
- ・文章表現（論述表現） 44名
- ・基礎演習ⅡB 25名
- ・基礎演習ⅢD 21名
- ・基礎演習ⅣC 6名
- ・人文学演習ⅠC 1名
- ・人文学演習ⅡC 1名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 94名
- ・言語文化論 6名
- ・古文書基礎学 32名

3、教育の方法

まず、初年次科目として専門に分かれる前の「基礎演習」では、学生の学力状況に鑑み、文章読解能力の向上を狙って評論文を数多く読ませている。文章を読解し、その内容を人に伝

達することを授業内で繰り返し演習することで、これまでに読解してきた文章量の絶対的不足や、自身の「感じたこと、おもったこと」しか出力してこなかった学習不足を補うトレーニングを授業内で行わせている。「文章表現」も基本的には同様に位置づけながら、アカデミックな文章を書くのに必要とされる技術だけでなく、文章を書く際に必要な物事の認識、把握の仕方、文章の構成の仕方を教授している。

「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。ただし、就任初年度の2022年度は、古典文学の演習を学生が主体的に行う為に必要な基礎知識が入っておらず、基礎知識の習得をさせることに時間を多く費やしてしまった。次年度より「日本語文法」の授業が設定され、古典文法を教授し終えた学生が多くいる状況になったところで、授業進行がスムーズになることを期待している。基本的には古典文学作品を多く自身の力で読解して考える機会をなるべく多くもてるようにし、その中で卒業論文にもつながっていく問題意識を涵養していくことが目標である。

次に、「日本文学史」「日本文学」「言語文化論」といった講義形式の授業においては、学生の問題意識の喚起を心がけている。古典文学や、それに関わる論理的思考に触れたことのない学生が説明を受けて内容を知ってそれだけで満足してしまうことの無いよう、内容を理解した先にどういった問題があるのか、そこに気づくことで世界の見え方がどのように変わってしまうのかを伝えることを目的としている。その工夫の一つとして、「日本文学史」「日本文学」の授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それを用いながら授業を進めている。プリント内には読解課題を設定し、説明されて理解したつもりになって満足することのないよう、自身で考え続けながら教室にいることを求めている。また、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙で、あるいは teams で学生自身が授業の中で学習したことをまとめて提出させている。感じたこと、思ったことではなく、毎回何を学習したか、それによって自身はどういった視点を獲得したか、振り返りを行うことで、漫然と授業に座ってプリント内容を覚えるのではなく、学習するというそのものを学んでいってもらうことを目指している。

最後に、「古文書基礎学」であるが、この授業はいろいろな専門で、或いは学芸委員資格に必要な能力である崩し字、特に平仮名を読めるようにするための授業であるので、視覚資料を用い、毎回文字を探す、読む実習を行っている。毎回のハードルを低く設定することで、学習の達成感を高め、一学期間を通して平仮名の習得を目指している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2022年度では、前期が「文章表現（論述表現）」、後期は「古文書基礎学」の2つの授業が「学生による授業評価アンケート」の対象であった。

「文章表現（論述表現）」の授業は、一学期の授業を通して一つの授業レポートを作り上げることを最終目標として、その提出を課題としたが、そもそもその課題の提出に至ることのできなかつた学生も散見され、また、それに至る為の一回一回の授業の段階的課題の意図がうまく理解できていない学生も見られた。最終課題まで提出できた学生からは「力がついた」「ほかの授業でも同じフローを経てレポートが書けそう」などの声が聞かれたが、提出できなかった学生には難しい点が多かつたようで、同じゴールを目指すにしても、さらにはしごを下ろした課題を設定していく必要性を感じている。

「古文書基礎学」では、毎回の課題設定がうまくいったようで、「毎回読めるようになっていくのが楽しい」「字が読めるようになったことで、自分で博物館にいったときに説明書きでなく展示物の字を自分で読んでみようとした」などの声が聞かれた。

そのほかの授業でも、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、学生たちが学に触れることによって自身の世界との向き合い方を構築していきけるように知識を教授し、問題意識を涵養していくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生がより多くの知識を獲得していくことのできる授業、そして、その知識をもとに、学生自身がさらなる学習を重ね、自分自身の問題意識をもって世界と対峙できる力を養えるような授業を心がけるつもりである。

2021 年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 山脇雅夫

1、教育の理念

同朋大学の建学の理念である「同朋和敬」には、阿弥陀仏の絶対平等の救いという教えが根底にある。この救いに救われていくものとして自己を見、他者を見ることは、社会的な身分や民族の差を超越した絶対の相において人間をすることである。そうした境位は、哲学がその根本において希求してきたものと重なっている。人が「よく生きる」ためには、そうしたものを求めていくほかないということが、哲学の父たちの根本的立場であった。わたしが教育において目差すのは、主として西洋の哲学の歴史を築いてきた哲学者たちの仕事に学びながら、そうした哲学の立場を学生諸君に伝えることである。そのことをつうじて、学生諸君がさまざまな日常的偏見から自分を解放し、とらわれのない自由で強靱な思考力＝哲学的思考力を培うことを支援したい。

2、担当授業の概要

- ・哲学 102 名（哲学の根本にあるものを西洋哲学の歴史に探る）
- ・哲学史 88 名（西洋近代哲学史、特に 17 世紀を中心に）
 - ・倫理学 50 名（功利主義、義務論、コミュニタリアニズム等、現代倫理学説を身近な問題から）
- ・ドイツ語 I, II 21 名（ドイツ文法初歩）
- ・人文学演習 I, II, III, IV 13 名（『現代思想の教科書』により、現代文化の根本特徴を学習。卒論指導）
- ・人文学講読演習 28 名（『倫理学の道具箱』により、倫理的思考法のさまざまな切り口を学習）
- ・欧州文学 30 名（ニヒリズム文学の流れを、ロシアのニヒリズム、ニーチェなどを素材として紹介した）
- ・欧州文学概論 I 51 名, II 39 名（欧州文学のバックボーンとしての聖書文学とギリシア文化）
- ・現代世界事情 49 名（SDGs から見る現代世界の諸問題）
- ・基礎演習 II 23 名（初年次教育。大学での学び方）
- ・基礎演習 IV 8 名（現代思想の基礎）

3、教育の方法

・各種講義においては、哲学・倫理学等の古典的な問題を現代的課題と結びつけことによって、古典的問題が今なお人間の課題であり、哲学・倫理学の考え方を現代を読み解く有効なツールとなっていることを学生諸君に確認してもらえよう努めている。あわせて、西洋

文化のさまざまな側面に教養を深めてもらうため、ギリシア文化や聖書といった西洋文化の土台、資本主義の精神などを授業テーマとして取り上げている。

・ゼミ等においては、哲学的テキストの精読・それについての討論を中心に、読解力、自分の考えを言語化し人に伝える能力、哲学的思考力等の涵養につとめている。また、レポート等の作成を通じた文章力の育成を目指している。

・どの授業においても、わたしは、教科書や教師から教えられた知識をため込むのではなく、自分の問題関心、自分なりの「？」から出発する思考の経験を重視している。哲学的問題は当たり前だと思っていたことを揺さぶるものであり、そうした力を、学生諸君が自分なりの問題を発見するために活用している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

・授業評価アンケートの数値はおおむね平均値以上を確保している。いくつものわたしの授業を受講している学生さんから「いろいろな授業がつながっていることがわかった」ということばをいただいたことは、わたし自身が意図したものでないにせよ、哲学、倫理学、講読演習といった授業がシナジー効果をあげているということであろう。この点は、今後は意識的に追及していきたい。一昨年改善点として指摘された「動画の活用を増やした方がいい」については、今期もギリシア悲劇ソフト（ソフォクレスの『エレクトラ』）を鑑賞するなどし、改善に努めた。

5、今後の教育目標

・上滑りに流れていく情報に曝されている現代の若者に、強力な思考や想いに裏打ちされた「ことば」に触れる機会を提供することは、文学部教育の課題である。「すぐ役に立つものは、すぐに役に立たなくなる」（小泉信三）ということ肝に銘じ、学生諸君が本物のことばをみずからの血肉化し、人生を支える力とすることができるよう、サポートをしていきたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科のアドミッションポリシーに、「文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むこと」を教育目的とするとあるが、私はその方針に基づいて、中国古典文学（史伝、中国哲学を含む）をベースに、中国語、伝統文化、映像文化に至るまで、「日本文学」「歴史文化」「現代教養」の三専攻にまたがって幅広く科目を担当しつつ、学生たちの基礎力や感性を磨くことを目指して教育に取り組んでいる。

2、担当授業の概要

2022 年度は以下の科目を担当した。

- ① 全学向け（基礎力養成に関わる）科目としては、
漢文基礎学Ⅰ、Ⅱに加え、中国語Ⅰ、Ⅱを二クラス担当した。これは、ここ数年の第二外国語履修者の積み残しに対応するため臨時に1クラス増コマしたものである。
- ② 文学部向け教養科目としては
現代教養概論Ⅰw（2コマ分担当）と文化総合（7コマ分担当）を担当した
中国芸能（表象文化論）及び芸術批評は、中国語増コマの影響で本年度は休止した。
- ③ 文学部向け専門科目（及び教職科目）としては
中国文学概論Ⅰ、Ⅱ、人文学講読演習Ⅰ、Ⅱ
- ④ 人文学科（ゼミ）専門科目
日本文学専攻と現代教養専攻の二専攻にまたがり
基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを二系統担当した
4年生に対しては人文学演習Ⅳとともに卒業論文・論文指導を行った。 以上

3、教育の方法

授業の方法としては、講義系の科目と演習（講読）系の科目とで大きくやり方は異なる。

講義系の科目では、予め用意したプリント資料を学生に配付し、その資料に基づいて逐次説明を加えながら講義するスタイルを基本とするが、学生たちの理解を深めるために多くの映像資料を副次的に用いるようにしている。授業時には折に触れて学生に質問をし、定期的にコメントペーパーを出させるなどして、学生の理解度を確認しながら進めることを心がけている。

演習系の科目のうち中国文学関係の授業においては、主として中国古典（漢文）のテキスト（白文の状態）を配布し、訓点をつけて読解することを学生たちに課している。毎回担当

者を定め、工具書（辞書など）や訳本、解説書等を参考にしてまとめた自分の読み方をレジюмеとして予め提出させた上で、授業時にはそのレジюмеを元にその読み方の可否を受講者全員で検討していくという方法を採用している。標準的な読み方を一方的に教えるというのではなく、学生たちに自分で考えさせ、なぜそういう読み方になるのかを議論させることで、より深い読解力が養成されると考えている。

現代教養専攻の演習では「表象文化」「地域文化」をテーマとしており、授業においては表演芸術（映画、演劇、古典芸能など）のビデオを実際に鑑賞した上で、その面白さ、芸術的価値などを受講者全員で討論する方法を採用している。

演習系の科目においては、文章を読むか動画を観るかの違いはあれども、学生個々が独りよがりにならず、議論を通じて自分自身を客観視できるようになることを目指すという点に違いは無い。

これらの教育方法は長年大学教育に関わる中で自然と醸成されたものだが、結果的にアクティブ・ラーニングなどの考え方にも沿うものとなっており、学生たちの自発的な学習意欲をかき立てるのにも大いに役に立っていると考えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

私が担当する科目は十年以上継続して実施しているものが少なくないが、その間の学生の授業評価アンケートの結果を見る限り、同一授業での経年変化、年ごとのばらつきはほとんど見られない。全体的な授業評価においては過去から現在に至るまで問題となるような結果が出たことはほぼないと言ってよい。

人文学科の場合、1年次の基礎科目の受講状況などから、2年次以上の学生の個々の学力レベルや傾向を、われわれ教員はほぼつかんでいる。演習（講読）系の科目は2年次以上が受講の対象となるが、私の場合、受講生の構成を見て授業の運営方針を立てるようにしており、2、3、4年生の人数バランスや、学力レベルの高い学生の割合等を勘案した上で、解説の質や量を変更し、学生の反応をよく観察しながら進めるようにしているため、年度当初はなかなかついて来られなかった学生も、半期終わる頃にはかなり変化を見せるようになるのが通例である。

我々教員は授業時の学生たちの変化に敏感になって根気よく指導すること以外にやるべきことはなく、アンケートはそれを確認する程度のものであるべきである。

5、今後の教育目標

昨年も指摘したことだが、文科省が唱える ICT 環境整備やギガスクール構想と本学学生の現状との間には明らかに温度差がある。スマートフォンの高機能化によって、情報収集からデータ保存、レポートの作成に至るまで、パソコンよりも便利に行えるようになってきたことを考えれば、パソコンで卒論を書くようにと強制することには意味が無く、スマートフォンを教育にいかに関活用するかを考えた方がよい。

今年度はコロナも落ち着いてリモートでの授業対応の割合は減ったが、双方向コミュニケーションツール「Teams」を使うことが学生たちにもなじんできたことを建設的に考える必要はあろう。

我々人文学をベースとする教員が大学教育の中で担うべき役割は、従来通り学生たちに、文献を読む能力（読解力）、資料を分析する能力（分析力）、それに基づいて議論する能力（ディベート力）、結果を発表する能力（プレゼンテーション力）を身につけさせるようトレーニングすること以外にはない。技術は時とともに移り変わるものであるので、それに乗り遅れないよう最低限努力する必要があるが、技術に支配されない普遍的な教育目標を持ち続けることこそ大切である。